

ネイザンロードのイルミネーション

庄内 拓明

「僕はあのコレクションは大嫌いだ」

シンガポールからやって来たファッション記者のトミーは、一九八七年一月の香港ファッションウィーク会場で開かれたあるメーカーのファッション・ショウを見終えるなり苦々しげに言った。いや、「大嫌い」では済まないかも知れない。彼の使った英語は「ヘイト(憎む)」という動詞だったのだ。

「ホワイ(何故)?」と僕は聞いた。

「何故って、理由は当然さ。あのコレクションには何のクリエイティビティもない。とにかくすべてが他人の物真似、コピーじゃないか」

彼はゲイ・ピープルが好むボストン・タイプの細い黒縁の眼鏡の奥で、東洋人としてはきれいな二重瞼の大きな両目を更に大きく見開き、両手をもどかしそうに開いたり閉じたりしてまくしたてた。

「クリエイティビティってそんなに大切なものだろうか」と僕は問い直した。「たかがガ-

メント、身に付ける布っ切れに。それに、今はなかなかよってきたコピーだった」

「クリエイティブイコそ全てじゃないの。君もファッションのレポーターならそのくらいのことはわかってるはずだろうに」

彼は長身の痩せた体を僕の方に折り曲げるようにして言った。

「僕はファッションのレポーターじゃない。ファッション・インダストリーのレポーター（業界記者）なんだ」

「ホウツ！」と彼は両肩をすくめて溜め息をついた。「ジャパニーズの考え方は僕にはまるつきり理解できない。ファッションが好きでもなのにファッションの仕事をしているなんて」「ファッションが好きでないというわけじゃないさ」

ショウが終わって客席に明かりのついたホールから出ると、この香港のファッション業界で最大の見本市の出展者は一日の商談を終えて書類の整理をしているところだった。ずらりと並んだ狭いブースの中に香港特有の色とりどりのセーターやカジュアルウェアのサンプルがぎっしりと飾られていた。ロビーから会場

出口に向かう通路沿いの総ガラス張りの窓からは香港の港の夜景が理想的に見渡せた。

香港。純真でスクウェアな体制の中に楔のように打ち込まれた、酒瓶を腰にぶらさげた街。愛すべき東洋的雑踏をカモフラージュする真珠のような街の灯。

「君はイツセイ・ミヤケが一番好きなデザイナーだと言ってたね」

「オウ、イツセイ・ミヤケ！」彼はとろけるような眼をして言った。「彼は最高（ザ・グレートイスト）。彼のデザインは純粹にアートだし、本当にファンタスティック」

「だけど、ほんの一部の人のために作られている」と僕は言った。「僕も彼のデザインは大好きだ。とても素晴らしい。でも、それ以外に誰でも気軽に着れるハイ・ファッションがあってもいいはずだ」

「確かに、今見せられたコレクションは誰でもがイージーに着れるハイ・ファッションなんですよよ」とトミーは言った。「だけど最低（ブルシット）」

彼にとっては自分の美的基準に合致しないものは虫けら同然だ。

「ねえ、君はこんなことを考えたことはないかい」と僕は彼の顔を見ながらゆっくりと言った。

「インドのヒマラヤの山腹には、沢山のヨガの行者が人知れず仙人のような暮らしをしている。彼らはとても純粹だ。聖なる宗教者だ。宙に浮かんだり、死者の霊と話したり、山を動かしたりといった奇蹟だってできるかも知れない。しかし、それが僕らにとって何の意味があると思う」

「言ってる意味がよくわからないね」

「僕らが本当に必要としているのは、街まで降りてきて皆を愛することを説いてくれる説教師なのさ」

「あのコレクションが愛を説いてくれる説教師かい？」

「そういうわけではないけどね」

「OK」と彼は言った。「あのコレクションは最低。けどとても低俗な愛を示しているかも知れないということね」

香港ファッション・ウィークの会場となっているワンチャイの街の近代的なコロシウムから出てトミーに別れを告げると、彼は意外にも「明日もまたディスカッションをしよう」と言

って手を振った。僕は彼にファッションのわからない単なる俗物という評価を下されずに済んだらしい。

ロシアムの正面玄関のタクシー乗り場で顔見知りの日本人記者の矢沢と会い、一緒にホテルに帰ることにした。彼は僕と同じホテルに泊まっているのだ。行列を作ってタクシーを待つ間、香港の一月の夜風は結構冷たく首筋を撫でた。

「あのシンガポールのにちゃんと話してたのか」と矢沢は足踏みをして体を揺らしながら聞いた。

「ああ、トミーのことか」

「気をつけた方がいいぞ」矢沢は指先を口の端に添えて言った。「あいつ、これだぜ」

「ゲイだからといって、男という男に色目を使ってエイズを移しまくるというわけじゃない

よ」

「君はゲイには妙に理解があるからな」彼はようやく順番の廻ってきたタクシーに乗り込みながら皮肉っぽく笑った。

「偏見がないだけさ」僕は彼の隣に腰を下ろした。

矢沢は運転手に行き先を言ってくれと目
示した。

「フートーザオティン、レイタントウ、ヤウマ
テイ」と、僕は広東語のアクセントに注意して
言った。どうやら通じたようだった。

「何だ、今のは」

矢沢は免税店で仕入れたポールモールに火
を点けながら言った。

「ヤウマテイのネイザン・ロードのホテル・フ
オーチュナというのを広東語で言ってみたん
だ」と僕は言った。「昼飯を食いながらフロ
レンスに教わったのさ」

フロレンスはこのファッション見本市の
主催者が我々日本からの報道陣につけてくれ
た広東語の通訳で、三年前に東京で一年間アル
バイトをしながら日本語を学んだということ
だった。若くて小柄な彼女は、その頃日本でも
香港でも流行だった黒のセーターとグレーの
ウール・スカートを身に付け、とてもチャーミ
ングに見えた。僕と彼女は日本語と英語がごち
や混ぜになった会話をし、時折日本語と広東語
を教え合った。

彼女は日本語の難しい言い回しの意味と使

い方を僕に訊ね、その代わりに最も基本的な広東語の挨拶の仕方などを教えてくれた。

「知ってるかい」と僕は矢沢に言った。「ありがとうと言うのは『シーゴイ』って言うんだ」

「シエシエじゃないのか」

「それは北京語だからここでは通じないんだ。物をもらったりした時は『多謝』（ドーチェ）と言うらしいよ。何かしてもらったら、そのサービスに対して『唔該』（シーゴイ）と言うんだ」

タクシーは香港島側から海底トンネルを潜り、大陸の九竜（カウルーン）側に出た。メイストリートのネイザン・ロードは、ほとんどの店がもう閉店していたが、クリスマスから旧正月に向けて飾りっぱなしのイルミネーションに照らされて相変わらず華やいでいた。金持ちの外国人目当ての高級ブランド品を扱うショップがオレンジ色の照明を点けたままで金網のシャッター越しに店内のカシミア・スーツやレザー・バッグなどを魅力的に見せびらかしていた。

そうだ。ここは外国人のための街なのだ。すべての街や通りは広東語の他に英語の名前を

併せ持つ。中環が「セントラル」、桜桃街が「チエリー・ストリート」、銅鑼灣が「コーズウェイ・ベイ」というように。もし日本で赤坂に「レッド・スロウプ」、原宿に「フィールド・ジャック」、青山に「ブルー・ヒル」、飯田橋に「イードウン・ブリッジ（エデンの橋）」などといった英語名が付いていて、それらを日本語の地名と一緒に覚えなければならぬとしたら、僕はその二重性に耐えられるだろうか。

僕はその頃、日本と極東の繊維とファッション産業を世界にレポートするための英文雑誌の記者をしていた。そしてファッション・ビルだの、トレーナーだの、エレガンス・プレタだの、ミッシー・カジュアルだの、DCブランドだのといった日本でしか通用しない外国語と、それらを無理矢理英語に翻訳する二重性とにシニカルに向き合っていた。しかし、それもここ香港のシビアで日常的な植民地的二重性に比べれば無邪気な遊びのようなものだ。

僕と矢沢はフートーザオティンのコーヒーショップで香港製のとてもライトなビールを汲み交わし、それぞれの部屋に戻った。

そのホテルは外国人向けの洒落た一等地で

はなく、いかにも香港らしい雑踏の中のビジネス・ホテルといった趣で、従業員もすれたところがなくとても親密な感じだった。とにかく香港のホテルで従業員の人懐っこい笑顔を見ることができるとまるで奇蹟みたいなものだ。

四階の部屋はとりたててきれいというほどではなかったが十分に清潔で、以前にニューヨークで泊まった壁紙が破れ放題の名前だけの一流ホテルよりはずっと居心地がよかった。向かいの映画館では日本映画(何とかいう女性歌手の歌う演歌を主題歌にしたものだった)と香港製のカンフー映画を上映していて、部屋の窓の真正面にその絵看板が見えた。極彩色で隣同士に同居する日本の映画女優とジャッキー・チェン。その看板の下のネイザン・ロードは夜になっても雑踏が続き、大勢の香港人たちが信じられないような大安売りのセーターやジーンズの露店を冷やかしながらそぞろ歩いていた。ここでは旧正月の前の一月が心浮き立つ年末なのだ。

ビルとビルの隙間には赤土の斜面が剥き出しになった無人の工事現場が見えた。ブルドー

ザーとクレーンがひっそりと蒼白い水銀灯に照らし出されていた。そこはまるで別世界のように通りの雑踏からフェンス一枚で隔てられていた。

僕は部屋のバス・タブで香港に着いてからの二日分の下着の洗濯をし、そして熱いシャワーを浴びた。

亜熱帯に位置するこの街のホテルのほとんどは冷房設備を持つが暖房設備を持たないので、真冬の明け方は毛布一枚では寒いくらいになる。香港での第一夜から、僕は仕方なくキルティングの施されたアンバー色のベッド・カバーを毛布の上に掛けたまま眠った。英国式の訓練を受けたホテル・メイドはベッド・カバーを掛けっぱなしで眠る礼儀知らずの日本人に正式のマナーを無言で教えるために、わざわざ毎朝のルーム・メイキングでそれをきれいにたたんでソファの上においてくれた。僕はまた、それを毎晩広げてベッドの毛布の上に重ねて眠った。僕はどうしようもない田舎者だと思われるに違いない。

香港の朝は早い。ホテルの部屋のカーテンの隙間から映画館や百貨店の看板のけばけばし

イルミネーションの明かりが漏れてくる暗いうちに、道を行き来する車の音が大きくなる。枕元に置いた腕時計はまだ五時を過ぎたばかりだ。

隣の部屋からは今日のビジネスの進め方を打ち合わせているらしい二人連れの東南アジア人の大声が聞こえる。このホテルの壁は段ボールほどの厚さしかないのだろう。

僕はテレビのスイッチを入れてすべてのチャンネルのボタンを押してみた。十二チャンネルの内の三分の二はザーザーいっただけだったが、広東語のニュース・ショーが一局とテスト・パターンが三局ほどあった。僕は画面をテスト・パターンのままにしてベッドに戻り、ベッドの背板に押しつけた羽根枕に背中を預けて座った。夜明け前の空気はとても寒かったので、毛布とベッド・カバーを一緒に引っ張り上げて両肩を被った。

僕はベッドに座ったまま、長い間テスト・パターンを見つめていた。小学校の四年生の時、僕の家で初めてテレビが登場した。その頃は三時から二時間位の番組の空白があり、僕は夕方の放送再開を待つて白黒のテスト・パターンを

食い入るように見つめていたものだ。テスト・パターンの画面を見るなんてその時以来だ。

毎日モノクロームのテスト・パターンを見つめていた頃、香港の街は僕にとって完全にフィクションの世界だった。派手な原色の仏教寺院。中国服に身を包み、細い目でニヤリと笑う毛皮商人。彼の実体は阿片の密売人、暗黒街の大物なのだ。胸の前で合わせた両袖の中の右手には、銃身に一杯の装飾を施したイタリア製のピストルが握られている。

ナイフ投げの名人。赤犬の肉を煮込んだむせかえるような臭いのスープ。稀少な動物の骨を粉にして作った秘薬。

貧しい人々は路地裏で竹の細工を商い、官僚たちはエキゾチックな宮廷で貧しい田舎から売られてきた女たちを侍らせて酒盛りをする。中にはもちろん日本の田舎から売られてきた娘もいる。

今、僕がいる香港は子供の頃の想像からはとても遠く、同時に限りなく近い。

明るく近代的で、活気に満ちている。しかし混沌に支配され、どこか怪しげな気配を一杯に漂わせている。日本よりもずっと西洋的で、そ

のくせ日本よりずっとアジア的だ。

カーテンの隙間からは夜明け前の薄明が漏れてきた。さて、きょうも香港のファッション産業に付き合わなくては。

七時前に矢沢から電話がはいり、一緒に朝食をとることになった。僕はコーヒー色のフランネルのズボンをはき、クローゼットから白いコットン・シャツを出して袖を通した。これが日本から持ってきたシャツの最後から二番目だ。きょうの夜はシャツの洗濯をしなくては。少し迷ってからカーキ色の部厚いセーターを着てロビーに降りた。彼は中綿入りのキルティング・ブルズンを着てソファに座り、備付けの英字紙を読んでいた。

「お早う」と僕は彼に声をかけた。「何かおもしろそうなニュースはあるかい」

「見出し位は読めるけど、中身はよくわからないんだ」と彼は照れ臭そうに言った。

「ホテルの外で香港流の朝飯を食べよう」と僕は言った。「この界隈の飯屋じゃ、英語なんて何の役にも立たないと思うよ」

カウンターでキーを預けると、例の人懐っこい笑顔が返ってきた。

香港的奇蹟。

そのホテルの界限では、道を一本西側にはいると安い飯屋が軒を連ねていた。入り口の上のすべてのスペースを占める大きな看板には分かりそうで分からない漢字の店名が一杯に書いてある。これらすべてが中華料理屋で、そのすべてが違う味わいを売り物にしているのだ。

仕事に行く前の香港人たちが思い思いに朝食をとっている。僕たちは適当に目星をつけてその中の一軒にはいった。店内は狭く、四人用のテーブルが五、六台並べられ、先客が三組ほどいた。特にきれいというわけではないが、汚れた感じもしない。きつとこの辺ではごく平均的な店なのだろう。テーブルの上に無造作に置かれた中国的赤の表紙のメニューには、漢字四、五文字の料理がうんざりするほどたくさん並んでいた。

「何が何やらさっぱり分からないな」と矢沢は呟いた。「英語の方がずっと楽だ」

「この『粥』というジャンルのの中から選ぶのが賢明だと思うよ」

「粥は粥でも、こんなに沢山種類があると見当がつかないよ」

「そこは想像力の勝負さ」

僕たちはそれぞれ、好みと思われた粥をメニューを指でさして注文した。痩せた中年のウェイターは僕たちの顔を一瞥もせず、無表情にその注文を口の中で呟いて確認し、さも面倒そうに奥の薄暗い調理場に伝えた。

香港における正統的不愛想。

暫くして出てきた品は、想定していた姿から概ね外れてはいなかった。

「案ずるより産むが易しだな」と矢沢は言った。

「何が出てきたって」と僕は言った。「覚悟を決めて食うだけさ」

僕は牛肉とほうれん草(多分そうだと思うが、別の中国野菜かも知れない)の入ったお粥を大きな銀色のスプーンで啜った。それはどんな高級レストランで食べる朝食よりも確実においしかった。矢沢は自分の粥を食べながら隣のテーブルの客の食べているワンタンと白玉の間みたいな外見の料理にいたくそそれらしく、あれと同じ物をくれと身振り手振りで追加注文した。それはその店の看板料理らしく、大きめの皿に十個ほど載せられてあつという間に運ばれて来た。僕たちは二人でそれをつま

んだ。トロツとした舌ざわりで意外な甘さのその料理の名前を、僕たちは今だに知らない。

ホテルに帰る時、僕たちはわざと遠回りしてヤウマテイの街を散歩した。

「今朝は貴重な体験をした」と矢沢は言った。

「俺は海外に出るたびに、現地の気取らない、そうだな、日本で言えば学生街の定食屋みたいなところで食事をして、現地の普通の人間が行く店で酒を飲んでみたいと思ってたんだ。だけど、実際は身分不相応なホテルのレストランやバーなんかにはか入ったことがなかった」「こう思うんだ」と僕は言った。「世界中のどこへ行っても、自分が普段日本で暮らしていると同じレベルでの飲み食いをするのが一番自然なのさ」

「その通りだ。なまじ高級レストランなんかに入ると肩が凝って仕方がないよ」

矢沢はとても快活に笑った。

彼は、僕が日本で思っていたよりもずっと素直で素敵な人間だった。

「外国で食事をするなんて簡単さ」と僕は言った。「ドアを開けて中にはいる。テーブルにつく。度胸を決めて適当にメニューを指さす。出

てきた料理を食べる。あとは金を払いさえすれば誰も文句は言わない」

「口に合うかどうかは運次第だな」

その日は朝から香港の代表的なセーター工場の見学という日程が組まれていた。

僕たち世界各国からのジャーナリストたちは、主催者が用意してくれた大型バス（香港では英国流に「コーチ」と呼ばれる）に乗って香港の中の郊外、新世界（ニューテリトリー）に向かった。バスで移動する間中僕は主催者側のスタッフから逆取材を受けた。英語が多少話せる僕は、日本への輸出拡大を重点施策とする彼らにとって逆取材の最適なターゲットとなった。

「我々にとって、日本は最も重要なマーケットになりつつあります」とファッション広報担当のルーシーは言った。「だから日本のジャーナリストが我々のフェアをどう見ているかにも興味があるのです」

「香港の商品には何の問題ありません」と僕は言った。「あとは、日本人があなたがたと対等に付き合えるかどうかです」

「日本人は我々の商品をヨーロッパの物以下

にしか見ないということですか」

「決してそういう意味ではありません。僕が危惧するのは、シャイな日本人があなたがたの強いエネルギーを恐れて敬遠しなければいけないということですよ」

バスの窓の外では彼らのエネルギーを示す高層建築がどんどん建設中だった。この街の建築はほとんど無秩序に増殖しているように見える。

「僕は一九八一年以来、香港には三度来ているし、その間に、あなたも二〜三回来日したはずですよ」と僕は言った。「あなたを含む香港の人は、会う度に自信に満ちていくようです」

「それは当然です」と彼女は言った。「わたしたちはその間に多くのことを学んでいますよ」

確かに、香港の人々はこの六年間に多くのことを学んだのだろう。その間に僕は如何ほどのことを学んだらうか。僕はその頃、自分が放電しつつあるような気がしていた。

僕がその頃学んでいたのは、世間というものだった。そう、ようやく僕は世間というものを学びつつあったのだ。しかし世間を学んで一体

何になるというのだろう。僕は自分が本当に学
びたいものを学んだことがはたしてあったら
うか。

途中で、ベトナムからのボート・ヒープルの
キャンプのそばを通り過ぎた。

「彼らをどう受け入れるかは、大きな問題です」
と彼女は言った。

「日本では、彼らを受け入れるか否かが大きな
問題なんです」と言って、僕は肩をすくめた。

世界の奥座敷で、肩を寄せ合って暮らす日本
人たち。

香港に来て三日目、そろそろ英語にも慣れて
会話のスピードが加速され、内容に深みが出て
くると、自分が日本人であることが不思議に思
えてくる。

僕は時々海外旅行のガイドブックを開いて
眺めることがある。ニューヨークでは自由の女
神、ブロードウェイのミュージカル、エンパイ
ア・ステイト・ビルディングなど、ロサンゼ
スではデイズニーランド、サンフランシスコで
はフィッシャーマンズ・ワーフ、パリではモン
マルトルの丘、シャンゼリゼ通りなど、フラン
クフルト周辺ではロマンチック街道、香港では

ヴィクトリア・ピーク、アバディーンなどが必
見の観光名所であると書かれている。

僕はこれらの五都市に行ったことがあり、そ
してこれらの観光名所には一度も行ったこと
がない。

僕はどこの街に行っても、時間があればその
街の人たちがくつろぐ公園に行き、その近くに
必ずある美術館に足を運び、観光客相手でない
店で買い物をし、気取りのないバーでビールを
飲む。そして、必ず観光名所に行きそびれる。

香港に来てあの「慕情」の舞台となったヴィ
クトリア・ピークに行かない日本人なんている
だろうか。

セーター工場は大きな倉庫風のビルが立ち
並ぶ街の一角にあった。一つ一つのビルがまる
ごと工場になっているのだ。初老のオーナーは
ジャーナリストたちを前に、自分の工場が如何
に優れた設備を持ち、如何に良質のセーターを
大量に生産することができるかを説明した。

「日本製のコンピューター制御のニットイン
グ・マシーンをこの春に大量に仕入れました」
と彼は誇らしげに語った。

「設備さえあればいいファッションを作れる

というわけじゃないさ」

トミーは冷笑的に僕に囁いた。

僕はその意見には賛成だった。良質であることが常にいいファッションであるとは限らない。それに、何が良質であるかは意見の分かれるところだろう。

僕たちは再びバスに乗ってファッション見本市の会場に戻った。その日の昼食はショウの主権者側の招待によるものだった。

「今日は潮州料理にしましょう」と主催団体の日本人スタッフ、戸田さんは我々に言った。「一口に中国料理と言っても、いろいろな種類があるんです。潮州料理というのはあまり一般的ではないけれど、話の種になると思いますよ」

彼女は日本に生まれ、香港で中国人と結婚し、そして日本の駐在事務所に単身赴任している。香港の昼食は喧噪に包まれる。その高級レストランの中には香港人たちの我先に喋る機関銃のような大声の広東語で一杯だった。

「食事の時の香港人たちの騒々しさには驚いたでしょう」と戸田さんは言った。「日本人からみると、まるで喧嘩をしているようだとわかります」

「喧嘩というのは言いすぎだけど、彼らは相手の言うことを聞いてその上で自分の言いたいことを言うという会話の原則を完全に無視していますね」と僕は言った。「それぞれがてんでんばらばらに言いたいことを大声で言い合っているだけだ」

「それは香港人の悪い癖です」と通訳のフローレンスが言った。「だから、香港人の会話というのは発展しないのです」

「広東語というのは北京語よりずっと騒々しく聞こえる」と矢沢が言った。

「その通り。粗野なんです」と戸田さんは言った。「広東語では愛は語れませんよ」

「じゃあ、戸田さんはご主人とは何語で愛を語ったんですか」と矢沢が聞いた。

「わたし、主人と愛なんて語りませんもの」と彼女は笑った。

「フローレンスはボーイフレンドとデートの時は、どうするの」僕はフカヒレのスープを自分の器にとりながら聞いた。

「そうですね」と彼女は少し考えて言った。

「そういえば、いつも途中からお互いに英語で喋っています」

テーブルは大笑いになった。彼女はとても正直だ。

広東語で食事をし、英語で愛を語るなんて素敵じゃないか。

理想的には、広東語で食事をし、フランス語で愛を語り、イタリア語で歌を歌い、ドイツ語で哲学を語り、英語でスポーツを楽しむのが最高だろう。さて、日本語では何をしたらいいのか？

一つの仮説。

日本語には、祝詞（のりと）が一番よく似合う。

決して日本語でビジネスをしてはいけない。すべての間違いは、日本語でビジネスをしようとするところから生じる。

午後からは、香港の若手デザイナーたちのファッション・ショウが催された。僕たちは既にこの種のショウには飽き飽きしていたが、主催者側のセットしたスケジュールに従って取材活動が義務づけられている。

何人かのデザイナーの作品はまるで平凡だった。トミーは批評するに足りないと言った。しかし、中には興味深いコレクションも合った。

トミーはそれに対しては「上手なコピーね」と皮肉った。

「世の中にそうそうイッセイ・ミヤケばかりいるわけじゃない」と僕は言った。

二つめの仮説。

創造の価値はそのコピーの量によって決定される。より多くコピーされるものはより価値がある。

ショウが終わると、僕たちは記者たちのために用意されたプレス・ルームに引き上げた。そこには無料のコーヒーとコークのマシーンがあり、この見本市の取材するために訪れたジャーナリストたち（半分以上が日本人だが）にとってはもつとも寛げる場所だ。

例によって、主催者側スタッフが「どんな印象を持ったか」と逆取材に転じた。

「何人かは興味深い。何人かはそうでない。(サムワンス・アー・インタレストイング・アンド・アザーズ・アー・ノット)」

僕は、一応の礼儀をわきまえた人間が可能な限りのいい加減な返事をした。

しばらくすると、そのショウのコレクションを作った若いデザイナーたちがプレス・ルーム

にやって来た。

「皆さん、彼らに自由にインタビューしてください」と主催者は言った。

彼らのジャーナリストたちへの配慮は至れり尽くせりだ。

「さっきのショウの中では、君のコレクションが一番気に入った」

僕はウイリアム・チャンというデザイナーに言った。

「ありがとう。そう言ってもらえて嬉しい」とウイリアムは言った。

彼はまるでラグビー選手のように体格がよく、白いスポーツ・シャツにリーバイスの五〇一モデルをはいていた。

「とてもきれいなアメリカン・イングリッシュを話すね」

「実は、十二歳までカリフォルニアで暮らしてたんだ」とウイリアムは言った。「だから僕のデザインはアメリカの影響が強い」

「だけど、まったくのアメリカン・ファッションというわけじゃない」と僕は言った。「全然別の印象を与える」

彼れは少し上目使いで言葉を選んでから言

った。

「それは僕が香港人だからさ」

「中国人ではなく、香港人？」

「血筋は中国人だ」と彼は言った。「だけど、香港人であるということは、単なる中国人であるということと全然別なんだ」

「君をウイリーと呼んでいいかい」と僕は聞いた。

「いいとも（シユア）」

「ウイリー、君は自分が香港人であるということとをどう思う？」

「僕はいつまでも香港人であり続けたいと思う」と彼ははっきりと言った。「僕らの父親の世代は今でも何とかして香港から逃げ出したいと考えている。そして財産をカナダあたりに移して、移住のチャンスを待っている。だけど、僕はこの香港の街が好きだ。例えばどんなことがあるうと僕はこの香港の街と一緒に生きたい」

「一九九七年に、中国に返還されても？」

「もちろん。僕のような者がいる限り、香港は香港であり続けるさ」

「それを聞いて納得した」と僕は言った。「君のコレクションには香港人としてのアイデン

テイテイがあると思つた」

「僕は中国の良質のシルクを使い、中国の伝統的な刺しゅうの技術をフルに利用する。だけでも僕の服はデイオールのようなイブニング・ドレスじゃない。香港人のイージーなカジュアル・ウェアなんだ」

「君にインタビューできてよかつた、ウイリー」と僕は言った。「君が香港を愛するように、僕も日本を愛せたらいいと思う」

「世界の誰でもがね」と彼は言った。

僕たちは握手をして別れた。久しぶりで気持ちのいい取材だった。

「ミスター・ショーナイは、ウイリアムのコレクションが随分気に入ったみたいですね」とルーシーが言った。

「頼むから、そのミスター・ショーナイと言うのはやめてくれないか」と僕は言った。「君たちが気軽にファースト・ネームで呼び合っているのに、我々日本人だけがミスター何とかと呼ばれるのはとても堅苦しい」

「でも、日本人のファースト・ネームを呼ぶのは失礼にあたると思います」

「僕も君たちのように、本名以外にイングリッ

シュ・ネームが欲しい」

「日本人のあなたが？」とルーシーは少し驚いたように言った。

「香港人は中国語の本名のほかに、例えば君のルーシーという名前のようにイングリッシュ・ネームを持つてるじゃないか」と僕は言った。

「それはどうやって付けるんだろうか。親がつけてくれるわけ？」

「いいえ、私たちは二十歳前頃になると自分で好きなイングリッシュ・ネームを選んで付けるんです」

「じゃあ、僕も勝手に付けよう」と僕は言った。

「僕はどんな名前がいいだろうか」

ルーシーの他にもう二人の女性スタッフまで加わって、僕のイングリッシュ・ネーム選びが始まった。

「そうねえ、ミスター・ショーナイはステイブという感じじゃないし」と一人はいった。

「ジョンでもトマスでもないわね」ともう一人が言った。

「僕はダスティン・ホフマンとウツディ・アレシが好きなんだけど」

「だめだめ、あなたはダスティンでもウツディ

でもないわ」

「レイモンド・チャンドラーとかジャック・ケルアックなんかも好きだな」

「レイモンドとかジャックとかいう感じでもないわね」

「ずいぶん難しいんだね」

「当然ですよ。名前を決めるんだから」

結局、僕はポールという名前になった。

香港人は皆、自分のイングリッシュ・ネームを決めるのに、いろいろな映画スターや作家の名前を挙げながら、ああでもない、こうでもないと思案するのだろうか。

三つめの仮説。

自分で自分に名前を付けることは、もう一度生まれるようなものだ。

「これからは、僕をポールと呼んでくれ」と僕は皆に言った。「今度来る時は、名刺にちゃんと『ポール』という名前を入れるよ」

僕は「ミスター・ショーンアイ」からただの「ポール」になって、とても身軽になった気がした。

それからしばらく、その場にいた香港の女性スタッフたちは日本からきた記者たちにイングリッシュ・ネームをつける遊びに熱中した。

「君はクラークだそうだよ」僕はフローレンスを連れて会場内を一回り取材してきた矢沢に言った。「スーパーマンのクラーク・ケントに似ているそうだ」

矢沢はまだいい方だ。ある大新聞の記者は「ライナス」になった。チャーリー・ブラウンに出てくる、あの毛布を引きずって歩く子供だ。僕はショウのスケジュールの空き時間を利用して、香港のいくつかのガーメント製造会社のオフィスを訪問した。それらはカウルン・サイドの奥深くにあつて、そうした地域は香港の中心街と違い、タクシートの運転手にもほとんど英語が通じない。

「香港では、やはり広東語ができなければとても活動しにくいのです」とフローレンスは言った。「でも、安心してください。わたしの役目は皆さんのメイク・ケアをすることですから、どこでもお供します」

香港の下町をタクシーで廻りながら、僕は彼女が十一人きょうだいの五番目だと聞いてびっくりした。

「香港ではどの家族もそんなに子たくさんな

「そういうわけじゃないの。ただわたしの両親はどうしても男の子が欲しかったので、十一番目にようやく男の子が生まれるまで子どもを作り続けたのです」

「じゃあ、十番目までは皆女の子だったのか！」

僕は十人の姉に囲まれた男の子を想像しようとしたが、とてもできなかった。

彼女のきょうだいたちは、夜はダブルサイズの二段ベッド二台で眠ったのだそうだ。一段あたり三人の勘定だ。

「でも今は四人の姉が結婚して家を出たので、ずいぶん楽になりましたね」と彼女は言った。

「まだ七人残ってるけど」

「じゃあ、次は君の番だ」

「わたしは残念ながらまだまだだね」

その日、僕は香港でも注目されている新興のゲーメント会社を訪問した。

香港のゲーメント会社のほとんどは、そのフアッシュヨナブルなイメージとは対照的な薄汚れた殺伐とした印象のビルが建ち並ぶ地区にある。時々輸送のための年代物のトラックが大きなエンジン音を響かせて行き過ぎる通りには、数人の失業者たちが寄り集まってひそひそ

と何やら話し合っている。彼らは決まって皺だらけのコットンシャツの裾をズボンの外に出してだらしなくジャンパーをはおっている。

タクシーは目指すビルがなかなか見つからず、同じところをぐるぐる廻ってようやく止まった。そのオフィスも埃にまみれただっ広いビルの一つに入っていて、ガタピシいう荷物用のエレベーターで六階まで昇ったところにあった。廊下のドアまでは荒廃した倉庫のようなイメージだったが、オフィスにはいった途端に白い壁とコーヒー色の板のフロアリング、キース・ヘイリングのポップな絵とパステル・カラーのカバーのついたソファで演出されたモダンなショールームが広がった。スタッフたちは流行の黒いシャツとパンツを身につけ、さっそうと立ち働いていた。若い社長のデスクの上にはIBMのコンピューターが二台乗っていた。彼は何とフローレンスの小学校時代の同級生だった。

「実は、僕はあの頃密かに君が好きだったんだ」と彼はフローレンスに言った。

「今頃そんな事を言っても遅すぎるわ」と彼女は言った。

彼はこの会社を妻と一緒に始めたのだった。彼の妻は黄色やオレンジの明るい色のキュートなセーターをデザインしていた。そして彼はそれを世界中に売りまくった。

「僕らのビジネスはともうまく運んでいまず」と彼は言った。「この好調がいつまで続くか不安になるほです」

彼は僕の質問にとっても丁寧に答えてくれた。彼の答えは充分説得力のあるものだった。細かいデータを要求する質問をすると、彼はデスクの上のコンピューターのキーボードを二、三回ポンポンと叩いた。すると必要な数字や資料が画面に即座に現れた。

「あなたのビジネスのやり方はとてもスマートだ」と僕は言った。「もし僕が香港生まれの有能なビジネスマンだったとしたら、あなたと同じようなやり方をするでしょう」

彼は笑いながら首を横に振った。「この仕事はとても忙し過ぎます。アメリカから大勢のバイヤーが押し掛けてきてランチを食べる暇もないので、きょうもサンドイッチをつまみながら商談をしました」

「それは気の毒に」と僕は言った。「あなたも

漢字の文化圏の人間だから分かるでしょうが、忙しいという字は心を亡くすと書きますからね」

「まったくです（エグザクトリー）」と彼は笑って言った。

ショウ会場のプレス・ルームに戻ると、トミ―がソファに横座りになってコーヒーを飲みながら僕の帰りを待ち受けていた。

「あれからずっと考えたんだけど」と彼は僕の顔を見るなり言った。「やっぱりファッションで一番大切なのはオリジナル・クリエイティブで、それのないものは単なるゲームントに過ぎないわけよ」

「とても厳密な定義だ」

「だからこの見本市は、『香港ファッション・ウィーク』じゃなくて、『香港ゲームント・ウィーク』にするべきね」

「そうすると、世界中の大抵のファッション・ヨウは単なるゲームント・ショウということになる」

「その通り」と彼は真剣な眼差しで言った。「正にその通り（イツツ・エグザクトリー・トルー）」
「それならそれでいい」

「それが君の意見？」

「それでもいいさ」と僕は言った。「ただ、君の言うファッションナブルな人間以外の連中だって裸でいるわけにはいかない。どんなグルメでも毎食キャビアばかり食べるわけじゃないし、ハリウッドのスターでも毎日ミルク風呂にはいつてるわけでもない」

「君はすぐに問題をすり替える」

「僕はファッションに対してリベラルでありたいのさ」

その日を中心とした二三日、僕は朝から晩まで英語を話した。プレス・ルームの女性スタッフたちは僕が日本人に見えないと言った。

「あなたは前髪を無造作に垂らしているし、スマイルのタイミングもわたしが知っている日本人とは違います」

そういえば最初に香港に来た時、あるオフィスで会った日本人のスタッフは、僕が名刺を出して日本語で名乗ったのに自分の名刺を出しながら「ナイス・トウ・ミート・ユー」と言つて握手しようとした。ニューヨークでは、街中で何度か道を尋ねられた。

「君は間違いなく日本人のメインストリーム

からは外れてるね」と矢沢は夕食を食べながら言った。「国内では絶対に出世できないタイプだ」

その夜は上海料理のレストランにはいった。魚介類の料理を数点注文し、紹興酒を味わった。料理はとても濃厚で、ひたすらに砂糖と醤油の味がした。僕は心の中で明日は絶対に四川料理にしようと思った。

「シヨーンナイさんは珍しいタイプよ」と戸田さんは言った。「わたしも普通の日本人とは一緒にして欲しくないという気持ちがとても強いんだけど」

「僕はいつだって背中に日本人の看板を背負って歩いてる」と僕は言った。「目が細くて、平板な顔で、O脚だ。日本人以外の何者でもない」

僕は大概の日本人よりもずっと日本人らしいと思う。僕は歌舞伎の見所を説明できる。合気道初段で、ワインよりも日本酒が好みだ。刺身の味がわかる。百人一首を暗記している。左ハンドルの車を運転するのが怖い。

「今の日本人は決して本来の日本人じゃなくなっているのかも知れないな」と矢沢が言った。

「今の典型的日本人は歌舞伎なんて見たことがない。合気道と柔道の区別がつかない。日本酒よりもワインの方が洒落てると思ってる。冷凍の魚しか知らない。百人一首の歌なんてせいぜい十首くらいしか覚えてない。イギリス車のジャガーを買う時でさえ左ハンドルのものを注文する」

「その通りね」と古田さんも同意した。

翌朝も矢沢と一緒にヤウマテイの街で朝食を取った。食事の後で朝の街を散歩すると、あちらこちらの建物のけばけばしい看板に「○○別野」という表示が多いことに気がついた。

『別野』って一体何だ」と僕は言った。「そこらじゅうの建物がみんな『別野』だ」

「別館かな」と矢沢が言った。「しかし、それにしては本館が見当たらないぜ」

「後でフローレンスに聞いてみよう」

その日タイムシャツ・イーストのアパレルメーカーを取材した帰り、僕はフローレンスと一緒に飲茶の昼食を取りながら、「別野」について聞いてみた。

「どうして、そんなことをわたしに聞くんですか」とフローレンスは少し怒ったような顔をし

て言った。

「別に、少し興味があつたからね。泊まってるホテルの周り中、その『別野』という建物ばかりだし」

「本当にその意味を知らないんですか」

「知るわけないさ」

「それは嫌らしいんですよ」と彼女は言った。

「日本でいえばラブホテルのことです」

「何だ、そうか」と僕は笑って言った。「僕たちは、そういう土地柄の真っ直中のホテルに泊まってたというわけだ」

「ショーナイさん」と彼女は急に真面目な顔になって言った。

「ポールと呼んでくれ」

「OK、ポール。でも、わたしはだめですよ」

「何が？」

「わたしはそんなところに付いて行く女じゃありませんからね」

「当たり前じゃないか」と僕は呆れて言った。

「そんなことを心配してたのか」

「そんなつもりじゃなかった？」

「全然」

「ごめんなさい」と彼女は言った。「わたしの

言ったことは忘れて」

「日本人の男は、よく君をそういうところに誘うの？」

「日本でアルバイトしてた時も、香港で通訳やガイドの仕事をしていても、しょっちゅうです」と彼女は言った。「日本人の男の人は奥さんがいるのによく浮気ばかりするものだと思ってました」

「少しはそうでない日本人もいるのさ」

「わたし、いつも思います」と彼女は言った。

「日本人は男の人同士で、夕べ買った女がどうだったとかいう話しをよくします。わたしが目の前にいるのにですよ。少なくともそれだけはやめて欲しい」

「わかるよ」と僕は言った。「僕だってやめて欲しいと思う」

僕は初めて香港に来たときのことを思い出した。

仕事を終わると、現地の日本企業のスタッフたちは僕たちジャーナリストを食事に招待した。そして高級広州料理の食事を終わると、僕たちは歓楽街のクラブに連れて行かれた。そこは紫色の照明がほの暗く怪しげな雰囲気醸

し出していて、ホステスたちは太股までスリットがはいったチャイナドレスを着ていた。他の男たちには多少日本語のわかる香港人のホステスが、僕には英語の話せるスペイン人のホステスが付いて、ソファに深々と座った。

僕はとても居心地が悪く、早くホテルに帰らなかった。

「あたしの名前はジーナ」とスペイン人のホステスは言った。彼女のドレスは胸開きがとても大きくて、はちきれそうな乳房が半分はみ出していた。

「ハイ、ジーナ」と僕は沈んだ声で言った。「マイン・イズ・シヨーンナイ」

「シヨーンナイサンね、今夜は一緒に楽しみましょう」

「楽しめるといいけど」

「あなたはこういうところにあまり慣れてないみたい」

「そんなに好きじゃないんだ」

「すぐに好きになるわ」とジーナは言った。「ミズワリを作つてあげましょう」

その場ではしばらくどうでもいい話題が続いた。僕はその話の中にまるで入り込めなかつ

た。

「楽しんでないわね」とジーナが言った。「もつとお飲みなさい」

「ごめんね」と僕は言った。「僕はきつところこういう場にふさわしくないタイプなんだ」

ジーナはとても陽気そうに笑った。

僕は一人だけで帰るのは失礼にあたるかどうかと考えていた。

「あなたは、今夜これからどうするの」とジーナが唐突に聞いた。

「帰るさ、ホテルに」

「誰と？」

「多分、一人で」

「一人で帰る必要はないわよ」

「どういう意味？」

「わたしが一緒に帰ってあげる」と彼女は言った。「ホテルのあなたの部屋でスパニッシュ・ガールと楽しい夜を過ごすのはどう？」

僕はその時ようやくこうした店のシステムを理解した。そういえば、日本人たちは「エスコート・クラブ」とか言っていた。そういう意味だったのか。

「申し出はありがたいけど、それは僕の望むこ

とじゃない」と僕は言った。「僕はお金では女性とメイク・ラブしないんだ」

「なんてオールド・ファッションドなの」と彼女は言った。「そんなつまらない考えは捨てなさい。そして人生を楽しみなさい」

「僕は十分に人生を楽しんでる。それに」と僕は言った。「僕はジーザス・クライストが何を言ってるか理解しているつもりだ」

これは僕の苦しまぎれの言い逃れだった。しかしそれを聞くと彼女の顔色が急に変わった。彼女はスペイン人らしく敬虔なカソリックだったのだ

「オウ、あなたはクリスチャンなの？」

「クリスチャンじゃなくてもバイブルぐらい読むぞ」

「ごめんなさい、わたしの言ったことは忘れて」と彼女は言った。「あなたとはもうベッドを共にすることはできないわ」

「わかってくれてありがとう」

「神を信じない人間はクレイジーよ」

彼女はそれから急に打ち解けて、自分は近いうちにスペインに帰り、軍人の恋人と結婚するつもりだと言った。「彼はとてもいい人。こん

なわたしでも最高に愛してくれるわ。わたしは最初の結婚に失敗してるから、今度だけは絶対に幸せになりたいの」

「素敵じゃないか」

「でも、問題は彼の母親よ」と彼女は顔をしかめた。「彼女は、自分の息子がダンシング・ガールなんかと結婚するのに大反対なの」

「それは問題じゃないさ」と僕は言った。「結婚の相手は母親じゃなくて、彼なんだ。いちばん大切なのは幸せになろうとする君の意思だ」「ありがとう」と彼女は言った。「わたし、幸せになるんだわ」

「僕もそう祈るよ」

ジーナと僕は他の連中が水割りを飲んでいる間中、ダンスフロアで踊った。踊っているのは僕たちだけだった。フィリピン人のバンドは「プラウド・メアリー」や「ヴィーナス」といった単純なロックンロールを叩きつけるように演奏した。僕たちはその演奏に負けないほどの激しさと踊った。最後には僕たちは拍手に包まれた。

「あなたとお話しできてよかった」とジーナは言った。

「僕も。後半は楽しかった」

ジーナがそれからどうなったかは知らない。スペインに帰って素敵な軍人と結婚したかも知れないし、彼の母親の強固な反対のために諦めたかも知れない。

幸せになっていいと思う。でも正直なところ、その可能性は五分五分だ。

「彼女も今君が言ったように『わたしの言ったことは忘れて』と言ったんだ」と僕はフローレンスに言った。

“But, she said that in English didn't she?”

彼女は英語で言った。

“Yes, She said 'Forget what I said'. ”

“I think your wife is really happy. ”

“I hope so. ”

“She can't be sad with you. ”

“Thank you. ”

その夜、僕は仕事が終わってからフローレンスに付き合ってもらって家族へのお土産の買物をした。

「高級ブランドの品物でなければだめというのでなかったら」と彼女は言った。「外国人向けのスーベニール店なんかは避けた方がずつ

と安上がりですよ。でも、値段をまけさせるのを忘れないでね」

僕はタイムシャツのごく普通のアクセサリー店で妻のためにアイボリーのプレスレッドを選んだ。一番シンプルで気に入ったデザインのもの。値札には五百香港ドルと書いてあった。その頃の為替レートで約一万三千円だ。「二百三十ドルにしてくれるなら、今すぐに現金で買おうと言ってくれないか」と僕はフロレンスに頼んだ。彼女はそれを広東語で瘦せた中年の男の店員に伝えた。

「三百ドルまでと言ってますよ。でも、もう少しがんばってみてもいいと思うわ」と彼女は言った。

「じゃあ、二百五十ドル」

彼女がそれを広東語に通訳すると、店員は僕の方に視線を向け「OK」と言った。

商談成立。ちょうど半額だ。

五歳と二歳になる子どものためには、百貨店で動物のぬいぐるみの形をしたリュックサックを買った。背中に背負うと、ぬいぐるみがおんぶしているように見える。これは当時パリなどではやっていたのだが、新し物好きなはずの

日本ではなぜか流行しなかったため、どうしても手に入らなかったのだ。

これもフローレンスのおかげで5%引きで買った。香港では百貨店でさえも値引きに応じる。代金を払うと店員はチケットをたくさんくれた。

「これはなんだい」

「それは抽選のカードですよ。今、香港では歳末大売出しの最中で、客寄せのためにどこの百貨店でも抽選をしているの」

「抽選会場で三角くじを二十枚近くひいたが、全部最低の六等賞で、賞品は真っ赤な色をした小さな袋が五十枚ほどだった。抽選の係員をしていた若い女店員は、その袋を数も数えずに無造作にバツサリと手渡してよこした。

「これはなんだい」

「それはお年玉袋」

「日本は太陽暦だから、もう遅いな」と僕は笑って言った。「それに、こんなにたくさんお年玉袋をもらってもどうしようもないよ」

「香港では、結婚した大人はとてたくさんお年玉を配らなければいけないの。そして、結婚するまではお年玉をもらえるの」

「じゃあ、君もお年玉をもらえるの？」

「そう、結婚するまでは権利があるんです」

「素晴らしい習慣だ」と僕は言った。

買い物の後で、僕たちは夕食をとった。何が

食べたいかとフローレンスに聞くと、彼女は

「ピザ」と言った。彼女は中国料理よりも西洋

料理の方が好みらしい。

「こんなにおいしい中国料理が回り中にあふれているのにどうして？」

「若い人はたいてい西洋料理の方に目が向いてますよ」と彼女は言った。「でもあなたが中

国料理を食べたいのなら、評判のいい店にご案内

内しますけど」

「いや、ずっと中国料理ばかりだったからそろ

そろ違うものを食べたくなった」

「ほら、ごらんなさい。わたしたちだつて同じ

ですよ」と彼女は笑って言った。

僕たちは香港のピザ・ハットでサラミと玉葱

の一杯入ったピザと山盛りのサラダを食べた。

その店は香港の若い男と女で溢れそうだった。

そして驚くほど値段が安かった。

「ごちそうさま」と彼女は言った。

「買い物に付き合わせたりして、迷惑じゃなか

った？」

「とんでもなく」

「君は本当に日本語がじょうずだね」

「おかげさまじ」

『For God's grace (神の加護じ)』 =

「あ、本当だ」と彼女は言った。『おかげさま
じ』と『For God's grace』が同じ意味だった
なんて、今初めて気がつきました」

「信心の問題さ」と僕は言った。

食事の後、僕たちはイルミネーションの輝く
ネンザン・ロードを散歩しながら帰った。大通
りは相変わらず活気の溢れる人出だった。

ホテルに帰った僕は携帯用タイプライターの
キーボードを猛烈な勢いで叩いて原稿を書
いた。書き出しは「香港は優良な品質のゲーム
ントの生産地としてのポジションを確立
していたが、次のステップとしてファッション
そのものを売り物にすることに決めた」という
ものだった。トミーの言ったことを思い出して
「ファッション」という言葉にはやや抵抗を感
じたが、他に適当な言い方がないのでそのまま
にした。「ゲームント」という言葉に置き換え
ると、この原稿そのものがナンセンスになって

しまう。

原稿の予定量の半分を書き終えるまで三時間かかった。残りは日本に帰ってから書くことにした。帰国予定日は翌日に迫っていた。

僕はスーツケースの中身を整理し直して帰国の準備を整えた。

シャワーを浴びてベッドに入ると、五分も経たない内に眠りに落ちた。もちろん例のベッドカバーをかけたままだ。

翌日は香港ファツション・ウィークの最終日だった。会場の人出は明らかに減っていたし、出展者の半分ほどは昼過ぎには店仕舞いをし始めた。すべてのイベントにつきものの「祭りの後」的雰囲気は漂い始めた。

「あつという間の一週間でしたね」と戸田さんは言った。「何だか気が抜けちゃうわ」

「燃え尽きないでくださいよ」と僕は言った。

「まだまだこなすべき仕事控えてるんだか

ら

僕は彼女とよく似たタイプの女性を一人知っている。以前に僕と同じ学生劇団でプロデュースをしていた女の子だ。彼女は公演が終わるまではこの上ないほどよく働き、申し分ない仕

事をした。そして公演が終わってしまおうと、過労のために三日間は寝込んでしまふのだった。昼過ぎにこのイベントの最終記者会見が催された。

主催者の代表はこのイベントは大成功に終わったと強調した。この成功によって香港のファッション業界は新しい段階に足を踏み入れたのだそうだ。それを聞いて隣の席に座ったトミーは口の端をゆがめて笑った。

僕と矢沢は帰りの便が一緒だった。フローレンスは空港まで見送ると言った。僕たちはありがたく好意を受けることにした。

荷物は既に会場まで運んできてあった。僕たちは大きなスーツケース二つをタクシーのトランクに積み込み、カイタック空港に向かった。タクシーの中で、僕はフローレンスに「君にはエクストラ・チャージ（超過料金）を払う必要があると思う」と言った。

「どうして？ わたしはちゃんと主催者からペイしてもらっています」

「だって、個人的な買い物とかに付き合ってもらったじゃないか」

「あれは仕事じゃないもの」と彼女は言った。

「フレンドとして付き合っただけだから、お金をもらうわけにはいかないわ」

「きつとそう言うと思ったから、実はこれに入れてきたんだ」と僕は前日の景品のお年玉袋をポケットから取り出した。「君は独身だから、断る理由がないよ」

「まあ、だってお正月はまだだわ」

「日本じゃとつくに終わってる。遅すぎるくらいだ」

「もらっときなよ」と矢沢が言った。「どうせ、こいつのことだから遠慮するほどの金額じゃないさ」

「ありがとう」と彼女は言った。「それでは、お年玉としていただきます」

キャセイ・パシフィックの飛行機は時間どおりにカイトック空港を離陸した。ビルの合間をぬって上昇し、方向を変えようと機体が傾いた時、暗くなりかけた下界にイルミネーションの輝く大通りが見えた。

「あれがネイザン・ロードかな」と矢沢が言った。

「そうかも知れない」と僕は答えた。